

強行遠足新聞

発行所
甲府第一高校
生徒会係
平成25年度版
第1号

されど…遙かなる小諸 ～感謝と勇気～



校長 奥田 正直



【強行遠足の成功を祈り、校舎に垂らされた懸垂幕 (第65回大会記録写真より)】

第87回強行遠足

本校最大の伝統行事である第87回強行遠足が、来る10月5日～6日に実施されます。今年は、男子の最終地点を小諸までとしました。あの許すことが出来ないう不幸な交通事故から11年の歳月が流れました。当時、私は教育委員会におりましたが、この伝統行事が存続か否かといった論点で新聞やTVで報道されていたことを覚えておられます。

その後、教頭として本校へ赴任し、当時の詳細な経緯を知りました。それは、御遺族をはじめ当時の生徒や先生方のいつの日にか小諸へといった思いが確認されていたということです。男子も女子も最終地点が野辺山となつてから、殆どの生徒が到達していません。そこで、平成20年から男子を小海まで延伸し、昨年女子も小海までとしました。男子は小海まで伸ばして5年が経過し、昨年度は7割の生徒が小海に到達し、機は熟したと感じました。昨年度の強行遠足終了後、小諸までの可能性を探る準備を始め、何十回も体育振興係を中心に長野を訪れ検討を重ねてきました。そして今年に入り、生徒をはじめ先生方、保護者や同窓会の方々へ説明を重ね、さらに準備を本格化させ、あと一ヶ月となりました。

開催まであと1ヶ月

第87回強行遠足は、10月5、6の2日間にわたって実施される。昨年、女子のコースが43・2キロに延長されたのに続き、今年は男子のコースも105・7キロに延長される。2002年の第76回大会中に起きた痛ましい事故を受けて距離を短縮して以来、11年ぶりの小諸コース復活となる。

男子は5日の13時に学校に集合して14時出発、翌6日の14時

い負担をかけることが、人の心の深いところに作用する」、また、記事をもとめた本校OBの記者もその答えを「人生をかけて考える宿題」とコメントしていました。これは、「なぜ、我々はそののか」

伝統行事で交流

今大会に北見北斗生が参加

平成4年から始まった、北海道北見北斗高校との交流は今年で21年目となる。

北見北斗高校は、一高と同じ行事名の強行遠足を昭和7年から実施している。「質実剛健」の気風を創るために山野を歩いていたことが現在の「強行遠足」へと発展している。今では伝統行事になっている。



【第84回大会に北見北斗生が参加】

と同様にそれぞれがそれぞれの答えをそれぞれの時に分かつていくものと考えています。結ぶに、心がけて欲しいことが二つあります。まず、強行遠足は保護者や同窓会の皆さんや検印所

を提供して下さる方々、その他管区警察、医療機関等、多くの方々の協力があったはじめて実施できているということです。一人一人がこれらの方々への感謝の気持ちを常に忘れずに、安全第に歩き通

万全な準備で挑んで欲しい

夜間の歩行になる男子は長袖、長スポンの上には蛍光タスキを掛

けることになっている。また、防寒着を準備する必要がある。男女とも検印所で身分証明書が必要になるので、万一看当たらない場合は早めに再発行の申請をすること。また、給水所では各自のカップが必要になるので忘れぬようにしてもらいたい。その他必要事項を実施要項で必ず確認すること。



【野辺山救護検印所のしじみ汁は心も体も温めてくれる】

キロの距離になると僅かな差が後半になって響いてくる。体育の先生方の指導に真剣に耳を傾けてもらいたい。自主的な練習もできるだけするとよいだろう。加えて

強行遠足に関する情報確認

強行遠足関わる連絡は学校のホームページに掲載いたします。

一高HP
<http://www.first/kai.ed.jp/>
※携帯電話からも確認できます。



最後に心の準備である。大正13年に強行遠足を導入した江口校長は書いています。人は少し疲れるとすぐ楽な道を考えるか、途中で止めてしまふ。こうした妥協に打ち勝つべきだと。未知のものに挑戦する時、阻害要因になるのは能力ではなく、妥協する心だ。人は自分が思う以上に強い。その事を知る貴重な機会だ。楽しみにしてもらいたい。

して欲しいと切に願っています。もう一つは、自分の身は自分で守らねばならず、やる勇気もまた大事だということです。皆さんのそれぞれの旅路の無事を祈っています。

第87回強行遠足 新たなはじまり

体育振興係 中澤 達彦



夏休みも終わり、日ごと涼しさが増すこの頃になると、いよいよ強行遠足の時期が来たなと感じます。昨年女子は、距離が13キロ延長され小海までの43・2キロになりました。今年は、男子の距離が11年ぶりに復活し、小諸までの105・7キロとなります。

しかし、距離が復活したからといって、小諸や小海まで行かなければならないということではありません。決められた時間、決められた距離、その範囲の中で「自分の体力に応じて、歩けるだけ歩く」というものが強行遠足の理念であり、

決して競争ではありません。自分で足を止めた場所が限界地点であり、本当のゴールは自宅なのです。いくら頑張ったとしても、自力で帰宅できないようでは、歩行計画に問題があったと言えます。そのことを念頭に、緻密な歩行計画を立てて参加してください。そして、非日常的な時間の中、己の限界に挑戦し、成長の糧としてもらいたいと思います。

また、限界が近づくと人間性が良く現れ、その言動が問われます。参加する生徒諸君の姿勢が、強行遠足の成功の力を握るといっても過言ではありません。

一高生としてのプライドを持ち責任ある行動を心がけてください。最後になりますが、今年も昨年同様、北海道北見北斗高校との交流生であります。今回は本校の強行遠足に北見北斗高校の生徒が参加します。昨年は、本校の2年生（現3年生）4名が北見北斗高校の強行遠足に参加し、たいへんお世話になりました。今年度は本校の番です。素晴らしい交流とならう皆さんの協力をお願いします。

それでは、生徒諸君の無事安全な帰りを祈るとともに、強行遠足の新たな歴史を刻んでほしいと思います。

私の強行遠足

卒業生の思い

「甲府一高と言えば」と人に聞けば十中八九「強行遠足」と答えるのではないかと。それだけ強行遠足の持つ意味は大きい。卒業生になぜ甲府一高に入学したのか質問すれば「強行遠足があったから」と答える方も多いだろう。また、ほぼ全ての卒業生が集まれば必ずと言っていいほど強行遠足の話が始まる。強行遠足とは甲府一高にとってそれだけ大きな行事の一つである。



体育科 大木 格
(平成17年卒)

「強行遠足とは」

私達の思い

しかし、私の同級生が集まるとそこまで強行遠足の話はしない。なぜか？それは私達が1年生の時の強行遠足で一人の女子生徒がなくなったからだ。同級生の女子生徒であった。私はクラスも違つし、直接話したこともなかった。

遺族の思い

母校に赴任することができ、強行遠足の準備をする中で、遺族の方とお会いする機会があった。痛ましい事故があったにもかかわらず、今でも強行遠足が続いているのは遺族の方の強い要望もあったからだそうだった。

多くの思いが詰まっている

強行遠足といふものは、ただ単に「伝統」という一言では片付けられない。できないものだと考えている。多くの方の思いが詰まった強行遠足。そこできか経験できない、得ることのできないものがある。体全体でそれを感じ、貴重な体験をしてもらいたい。

「今でも普通に家に帰って帰るんじゃないかと思ってしまうんです」。その

「意味」を探して・・・

去年の強行遠足の体験談と友達置いて行った。私にとっても、ほとんど覚えていない。それだけ必死になれた。一緒に走ろうと約束した友達も途中で脱落した。その後は、途中にいるお父さんに一番の姿を見せたいと言いつつ、ペースが上がっていた。途中、私達と会うポイントの方や先生方へは、感謝の言葉を述べた。でも、私は走って思ったのは、コースを間違えてしまった。例えは夏休みの課題、正直やりたくない、面倒くさい。でも、一高生として夏休みを過ごすのだから、諦めてはならない。やらなければならないと思う。



2年 志村 佳太

「強行遠足の前に校長先生

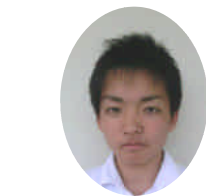
強行遠足にむけて

自分との戦い

「伝統の100キロ復活」が甲府一高を飛び越えて山梨県、そして全国にも伝わっている。

一つ目は、「100キロ」を走りきりたい、自分の本々の限界に挑みたいという思いだ。私たち男子生徒の中で「小海」と「小諸」はよく聞かれる。二つ目は、一文字違うだけなのに、そこには言葉では言い表すことが出来ない何かがある。その「何か」を求めて、今回私たちは強行遠足に臨む。

24時間、時間制限、天候と、生徒のほとんどは、「昨年の75キロでもきつかったのに、あと30キロなんてとても厳しい」と口をそろえるが実際はどうかだろうか。又、男子ばかりが目される強行遠足だが、女子も高根から小海の約40キロと、フルマラソンよりも長い距離に挑む。女子も男子同様二つの思いを抱えていることだろう。男女共に言えること、それは自らの限界に挑戦することである。一人ひとりに、それぞれの限界がある。100キロに少し怯えている人も、そのような心持で取り組んでほしい。



2年 河野 倫也

二つ目は、完走できるかどうかの不安だ。100キロ、

今から、今日から限界に挑める体力作りを始めてみてはどうだろうか。待つてろ「小諸」待てろ「小海」！